第3種郵便物認可　2012年（平成24年）1月25日（24日発行）

AB統合版　日刊ゲンダイ

〈日刊〉第10603号
1月25日（水）
2012年1月24日発行
〈日・祝〉休刊
1990年8月6日第三種郵便物認可

私がハマったすごい本

無音世界に音をもたらしたファーブル昆虫記

志茂田 景樹氏 作家

1940年、静岡県出身。76年、「やっとこ探偵」で第27回小説現代新人賞を受賞し、作家活動スタート。80年、「黄色い牙」で第83回直木賞を受賞。現在は、執筆のほか「よい子に読み聞かせ隊」隊長としても活動。

5歳のとき、中耳炎をこじらせてしまい、小学校1年の一時期、耳が聞こえなくなったことがあるんです。ちょうど春から夏くらいの頃で、夏休みに入っても僕の耳に音は聞こえてきませんでした。人の声は、声質によっては聞こえないこともないけど、生活音に関しては、背後でコップが割れても聞こえないレベル。そんなわけで水泳も出来ないし、友達とも遊べず孤独な日々を過ごしていました。

そんなある日、父の来客が僕にお土産を持ってきてくれたんです。それが子供向けの「ファーブル昆虫記」（写真は古川晴男訳全6巻各1200円偕成社）。もともと、虫には興味があったので喜んで手に取ると、そこには僕のまったく知らない世界が広がっていました。もちろん昭和22年当時、田んぼや畑では青虫などがいて見てはいたけれど、表面的なことしか知らなかった。でも本には、アリや蜂など生態が、音ではなく〝目に映る世界〟の中でイキイキと描かれていたんです。そこに強烈な印象を受けた僕はたちまちハマり、自分でも探索してみよう！と早速、庭へ。するとアリの行列を発見、じっと見ているとサボるやつ、せっせと働くやつなどさまざまいて、何時間見ても飽きることはありませんでした。

以来、僕はコロボックル（森の妖精）になった気分で、毎日庭で過ごすようになりました。挿絵にあった狩人蜂を探したり、フンコロガシを探して子どもの足で20分もかかる牧場に出かけたこともあります。フンコロガシ＝牛のフンという連想をして出かけたものの、フンコロガシは見つけられず、代わりに廃虚となった建物から立ち上る異様な雰囲気にビビって逃げ帰る始末。帰り道で会った近所のおじさんが言うには、食肉解体場だったそうです。その後も出かけた先でフンコロガシを探し続けましたがこの年になっても未遭遇なのが残念です。

とこんなふうに虫を追いかけて過ごした夏休みだったんですが、不思議なことに、思い出にはちゃんと音が伴っているんですよ。庭で聞いたセミの声、蜂の羽音、里芋の大きな葉っぱに打ちつける夕立の雨音、そして葉っぱの上にたまった水が傾いたはずみで、パシャンと落ちる音。恐らく勝手に音を夢想してたんでしょうね。

耳はほどなくして治りましたが、「ファーブル昆虫記」のおかげで、無音だった世界が賑やかに、豊かなものになりました。だから今でも、この本を目にすると音にあふれた夏がよみがえるんです。

（次回は大岡玲さん）